

# 横浜歌人会 会報

## 103\*

横浜歌人会会報 第103号

### 目次

- \* 01 年頭の挨拶…代表委員 千々和久幸
- \* 02 観月会報告  
観月会報告記…高尾文子  
詠草  
観月会に参加して…中村規子/苧谷君代/林静峰
- \* 05 新入会員自己紹介  
…半澤敏子/野一色容子/日向輝子
- \* 06 横浜エッセイ…相澤一男/渡辺礼比子
- \* 07 会員歌集紹介…池谷しげみ 小島熱子歌集『りんご1/2個』/平野久美子 結城千賀子歌集『天の茜』
- \* 08 新会員のご紹介/告知板

大きく息をしよう——伝統を更新すること

代表委員 千々和久幸



ここいらで一つ大きく息をしよう、というのが皆様への年頭のご挨拶であります。

わが横浜歌人会が新しい体制と構想のもとに再出発をしてから早くも二年、慌

ただしく息急ぎ切って駆け抜けてきた足取りを振り返り、ここいらで大きく息をして次のステップに備えようというのが深呼吸の主旨であります。

世界でもっともエキサイティングで魅力ある組織に、会員誰もが愉しく寛げる組織に——を合言葉に旧来の運営に新たな工夫を凝らして参りました。

幸い新春・観月の二度の歌会も研究会も会報も、会員の皆様のご協力を得て面目を一新することが出来ました。またホームページは情報発信の新たな武器となりつつあります。

そして昨年から始めました文学散歩（吟行会）も好評をもって迎えられましたので、本年度はさらにアイデアを凝らした企画を用意致します。

本年度の年間の行事の進め方、考え方を左記しておきます。

#### 1、新春歌会及び観月会を充実させる

批評についてはこれまで通り、第一評者（おおむね席順）と第二評者（出席者の中から指名）を立て、作品の読みを深める。司会者は一人とし責任をもつて読解をする。

#### 2、研究会はテーマを決めシリーズ化する

当会のメインの行事として今後シリーズ化し、発展させていきたい。個人ではなかなか勉強の糸口の掴めない他ジャンルとの交流を通じて、短歌という豊かな表現形式の可能性を追求する。

過去二回は短詩型文学に関わりのある有識者を招き、議論を深めてきた。本年度はさらに幅を広げ、グラフィックデザイナー、カメラマン、パタンナー（服飾家）との交流・議論を通じて、表現の根源を問い詰めた。

#### 3、文学散歩（吟行会）を愉しく

本年度は海の上を散歩することにした。具体的にはランチ・クルージングで、横浜港を巡り作歌意欲を盛り上げたい。費用が掛かるのが難点だが、これから貯金をすれば間に合う範囲で企画する。

#### 4、会報には会員の声を

新体制に移行して第99号から103号まで五冊を刊行した。当会の先達歌人のインタビューや研究会の詳録など、版も頁数も刷新した。

今後はさらに会員の作品の紹介と批評、消息など会員の声を反映させていきたい。

#### 5、ホームページを積極的な武器に

当会の会則には「短歌に関する情報発信や情報交流等を行うことにより、地域の文化土壌の醸成を図る」（目的、第2条後半）と明記している。この目的達成の有力なツールとして、ホームページの益々の活用をはかりたい。

さあ手を携え大きく息をして、更なる一步を踏み出しましょう。伝統の火を新たに燃え上がらせることが、即ち伝統の更新こそがわたしたちの使命であります。

観月会報告記

高尾文字

平成二十三年十月十五日、横浜歌人会恒例の観月会が桜木町駅前ワシントンホテル内「東天紅」に於いて開催された。ホテル最上階の会場は、みなとみらい21地区と野毛山方面とが一望できる横浜ならではのすばらしいロケーションである。今年は六十五首の多様な（月）の力詠が寄せられた。

午後二時。千々和久幸代表の開会の言葉に続き、第一部の歌会が始まる。円卓を囲む和やかな雰囲気の中、出席者各人が順次一首について忌憚なく批評鑑賞し、さらに歌評の丁寧なまとめが行われ、充実した歌会になった。司会の高尾が担当した。

古来（花鳥風月）（雪月花）など、詩歌の風雅に詠い継がれてきた月であるが、未曾有の大震災後に迎えたこの秋は、横浜の歌人たちにも特別の深い思いが月の歌にこめられていたのではなからうか。

第二部の懇親会は午後五時より。乾杯の発声は貴重な記録写真集を出版された小野政男氏。中華料理の数々が並び、あとは月を待つのみだが、待望の主客は中々現れない。しかしそれを補うかのように、夜空に回る大観覧車の煌めきが美しい。

角宮悦子氏は長い歴史のあるこの観月会を回想し、これまで二度ほどしか満月にまみえなかったと語り、会場に明るい笑いを誘う。数々の懐かしい思い出が私にも甦り、多くの良き歌と人との出会いの場であったことを改めて実感する。

長野義和氏による全体のスムーズな進行と、委員の方たちの協力のもと、港の夜景を惜しみつつ盛會裡に七時に終了した。

詠草

平成23年10月15日（土）—東天紅ワシントンホテル店

- 1 雨音に窓をしめれば暗皓と南の空に半月の照る  
石田幸子
- 2 夜祭りの神輿かつぐと白足袋の白を揃えて月の出を待つ  
平野久美子
- 3 目<sup>め</sup>の目から流れくる人びととすれ違ふとき匂う十月／月光  
吉野裕之
- 4 朝明けの空の渚にたゆたひて沈みゆくなり十六夜の月  
河北笑子
- 5 余裕なき心の日々に君よりの「満月見ろよ」とメール届きぬ  
塚田キヌエ
- 6 空渡る満月皓たりふと母の逝かしし米寿も望の夜なりき  
金田祐子
- 7 昔人もさみしくありけむ夜毎出づる月にひとり  
の姫を生れしむ  
工藤こずゑ
- 8 ひややかに月澄みわたる原発の廢墟の上に見る人のあらむ  
相澤一男
- 9 さよならを言いそびれたりビルの上月もこよいは酩酊をして  
千々和久幸
- 10 侍従川の流れに映る月涼しウオーキングの足を伸ばして  
藤田絹子
- 11 久方の月のまどかに昇りそむ洗ひ髪梳くゆふべ  
すずしく  
日野原典子
- 12 しかられて夕べさみしい街のなか月に照らされ大人になつた  
後藤恵一
- 13 満月の光あびつつ遊びしよケンケンパッパ・ケンパッパ  
野崎美智子
- 14 澄みに澄む真夜の望月閨に見て明日の命を静かに思ふ  
本田豊明
- 15 『山月記』の中島敦は元町の風俗詠ひていたく  
明るし  
野一色容子
- 16 ビルの間<sup>あわい</sup>にかかる満月の見事さに友呼び来るも  
はやくれんとす  
片野浜子
- 17 長兄の出征の夜名月にかの日祈りし旧友<sup>とも</sup>らは無  
事か  
鈴木和江
- 18 台風<sup>ふう</sup>に傷む木蓮の葉を癒し月の光のこよなく注  
ぐ  
伊藤美枝
- 19 宇宙船より写し出されし壮大な地球の彼方月の  
墜ちゆく  
平井郁子
- 20 小男の俺まで狩られて六〇日嬉しかったねえ敗  
戦の夜の月  
小野政男
- 21 白き花梅雨には多く夜気吸へば十葉の葉に月の  
もれある  
伊藤宏美



お月様を見ることはできませんでしたが、真剣に勉強しました。



歌会の司会は高尾文子さん

- 22 「原子力で明るい未来」のアーチ架かる無人の町に無言の満月 田之口久司
- 23 天心に月冴えわたり静かなり花火大会をはりし熱海 長谷川静子
- 24 業平の代の月の光こそ今あたらしき塔の尖端に降れ 神谷由希
- 25 月かげの下にたたずむ芝の庭雅楽の音いる淡くひびけり 西 登喜子
- 26 月光が屋根の瓦をすべりきてそして胸先ひんやりと切る 山本登志枝
- 27 セシウムが研ぎしか中秋名月のさえざえ照らす大き樟 松井芳子
- 28 氷河響れば月光もまた鳴りそむと言ひし人はも帰らずなりし 大沢優子
- 29 旧友に逢ひたる如きなつかしさ数年ぶりの中秋の月 佐々木千枝子
- 30 いくたりの人おくりしや列島の冴えてはるかな中秋の月 田代弥生
- 31 病得てムーン・フェイスになりいたるこの世のわたし薄が似合う 長野道子
- 32 病む母の肩を抱きて共に見し愛しき満月二度と目見えず 半澤敏子
- 33 この夏の最後のゴーヤうらなりを十六夜月がしつかり照らす 矢野豊子
- 34 いまもなほ野晒しといふ玉砕の島々照らせし月かと仰ぐ 角宮悦子
- 35 明暗にさやけき月を仰ぎつつ坂を下るに蝸の啼く 松本嘉猷
- 36 ふるさとの梨籠に盛り風評を祓い給えと月に祈りぬ 朝井恭子
- 37 ヴェネツィアに着きたる夜のしろき月きのふ日本を照らしぬしつき 小島熱子
- 38 教へ子のコンサートへの途次見たる日本丸の憩ふ満ち潮 小林 勝
- 39 赤彦の詠みたる月の鋭さを教育実習生われは語りき 刈谷君代
- 40 珊瑚樹の実の間より見る月は亡き父母を思い出させり 新田由美子
- 41 台風の去りたる朝 庭樹木にて鳴きぬし蟬の声びたり止む 中村規子
- 42 ローエングリンの輝く鎧想はせて月押し照れり友亡き秋を 津金規雄
- 43 この年の名月今宵冴えわたる災の地照らせと栲り仰ぎぬ 清水八千代
- 44 家と家のはつかな隙に耀けり両脇欠くる大き望月 土屋美代子
- 45 橙々の月のぼるまでシャボン玉うすき膜を吹き続け 高橋みずほ
- 46 観月会今年も月の歌作りうさぎを糧に数首を詠まむ 間 ルリ
- 47 白じろと臥所を照らす立待の月見送りぬ午前四時半 中川暁子
- 48 賜りし羊羹切れば満月と兎あらはる 今宵十五夜 田谷幸子
- 49 ひとつつ灯の昼にともればうそ寒し北鎌倉の明月通り 井澤幸恵
- 50 ゆふべの月忘れ行きしか目を凝らす風船蔓の白花三つ 山中登久子
- 51 植込みの虫の鳴く音を背に聞きて桜通りを観月会にゆく 長野義和
- 52 宴果ててひとりとなりし裏通り蕪村の月に送られゆかん 渡辺礼比子
- 53 月満たず生れしわれは叩かれてやうやく産声を放ちしといふ 早島和子
- 54 散らばりてはた群れて咲く曼珠沙華あの日のに照らされている 小寺敦子
- 55 9・11、グラウンド0に月登る祈れるさまに神を伴い 原 昌子
- 56 まればとのホモサピエンスの足跡を紋章として輝るや満月 高尾文子
- 57 わたくしの隣りを歩む月の影帰らぬ遠き日の抱かれて添うくる 鳥山佳克
- 58 月光に尾花影ひく径をゆく夢にもひとり 覚めて寂しむ 結城千賀子
- 59 成し遂げて空見上ぐればややあつて吾が身貫く十六夜の月 綿貫昭三
- 60 祖父の月またわれの月にしてしばし埠頭をさすりて行くも 鳴海 宥
- 61 長月の風のつめたさ道端に死は音もなくまたたいてある 中川宏子
- 62 かぐや姫いざなふやうに月よ照れ東北被災地に御伽となりて 林 静峰
- 63 夕茜残せるそらの三日月 曼珠沙華しんと輝き出だす 佐波洋子
- 64 児童公園予定地決定「自然林」帰るさ仰ぐ月も見られず 上木稟葉
- 65 秋の月悲しけれども復興の街を明るく照らす日あらん 渡辺 謙

## ■真摯な勉強会

●観月会に参加して 中村規子

十月十五日、観月会の日。空は雨が降りそうな雲に覆われていた。会場は、桜木町駅前のワシントンホテルで、その二十四階にある東天虹であった。今年も月を見ることはできないと思いつつ会場に到着した。この会場、実に見晴らしが良く、窓からは広々とした横浜の海が見渡せた。船が白い波飛沫をあげて出入りしている光景を、高いところから眺めると、実にすばらしかった。横浜らしさを満喫できた。横浜にこだわり、今までのマンネリズムから脱却し飛翔しようとしている今の運営委員の方々の気迫が感じられた。歌会は、高尾文子氏の司会で始められた。批評は、前方の円テーブルを囲んで着席している人から、順番に進められた。そして、七首終わる度に、司会者に指名された人が、総合的な批評をする、二重形式であった。何故か活気がある。真摯に着実に進行される過程の中で、全員がいつか短歌に集中させられ、充実した学習の時間を持てた。この日の出席者五十五名全員の作品の批評が終わった所で、東天虹の中華料理が運ばれてきた。皆で横浜歌人会の発展を祈願し乾杯した後、周囲の仲間と話し合いながら、美味しい中華料理を味わった。食事がある程度進んだ折、長野義和氏の司会にかわり、疑問点について意見が求められた。幾つかの意見が出され、作者から説明され、納得ができた。とにかく初めから最後まで、短歌の勉強に徹した。友人は、勉強しながら作るもの、この流れの中で、豊かな友情が芽生え、親睦が深まってゆくと思えた。外はすでに夜、海に幾つもの燈が光っていた。

## ■月はくまなきを見るものかは

●観月会に参加して 荻谷君代

横浜歌人会に入会して、初めて参加させていただいた観月会です。

兼好法師の『徒然草』に「月はくまなきをのみ見るものかは…」とありますように、当日、現実の月の姿は見えなくとも、会場にはさまざまに心ひかれる月がありました。

水河が響るときにともに鳴りはじめるといふ月の光、ビルの上の酩酊した月、原発の廃墟に照る月、蕪村の月、望月、三日月、立待の月、十六夜の月：一首一首にこめられた作者の方々の思いを、大切なものとして、読ませていただきました。

懇親会の席で伊藤宏見氏の語られた、月を見るということは、自分の「菩薩心」を見ることなのだというお話が、とても印象に残りました。

さまざまな思いで月と対峙してきた古今の人々：そして私も、月と重なる幾つもの思いが作歌の糧となりそうです。努力したいと思えます。

会場の窓から外を見れば、汽車道、大さん橋、帆をたたんだ日本丸、赤レンガ倉庫、大観覧車等が、夜景の中にきらめいています。ここが、日本の歴史の大きな転換期の舞台のひとつとなった「横浜」なのだ、あらためて思いました。

この観月会のために、お世話くださいました方々に心より感謝申し上げます。どうもありがとうございます。そして、これからもいろいろな活動に参加させていただきますのを、楽しみに致しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## ■観月会感想

●観月会に参加して 林 静峰

このたびの観月会は、残念ながら、望みの月にはお目にかかれませんでした。詠草数六十五首、当日参加者は五十五名。高尾文子氏司会による意見交換約三時間、七・八人掛けテーブル七卓を単位としてプリント掲載順に七首の詠草を基本に各自の意見を述べ合うようにし、その後、司会者による簡単なまとめ、更に、分担された役員が、いわば、補足的に意見を述べるような歌会の運びであったように思われた。これにより、各詠草がかなり理解されたようであるが、何分に意見を述べる時間が各人二分という短時間であり、納得のゆくところまでいかない批評もあった。しかしながら、このたびは、懇親会の席で作者と対話して内容を深める機会を多く設けてくれたことは実に有意義であった。

本年は三月十一日の大震災に関する歌八首（用例・ひややかに月澄みわたる原発の廃墟の上に見る人のあらむ）、戦争・故人を偲ぶ歌十二首（用例・いまもなほ野晒しといふ玉砕の島々照らせし月かど仰ぐ）など哀しみ・淋しさなどを詠む歌が多く目についた。しかし、明るさ・快さ・希望等を覚える歌（用例・秋の月悲しけれども復興の街明るく照らす日あらん）が三十首余りもあり、心を安らげてくれた。

このたびの会は、進行の仕方を含め、企画の構成が十分に配慮されたものであり、少なくとも今後しばらくは踏襲してもよいのではなからうか。企画・運営に関与された皆様に謝辞を申し上げます。

## ■はじめまして

●新入会員自己紹介 半澤敏子

新年おめでとうございます。  
伝統ある横浜歌人会の、末席に加わらせて頂きまして有難うございます。

幼い頃、家族との百人一首をしたおぼろげな記憶をのぞけば、和歌とは無縁な中に身を置いておりました。第二次世界大戦の影響にて、小学校は五校に転校、当時の子供のほとんどがそうであった様に私も情緒不安定な痩せこけた子供でした。六年生で転校した栗田小学校の角田浩先生より、小林一茶、与謝蕪村の俳句を学び、言葉の持つ不思議な力を知りました。敗戦後の混乱の中で、「踏まれてもまた伸び出でよ野の若芽」と書かれた色紙を頂いて卒業した日の感激は、今も忘れる事はありません。

捜真女学校に入学してから、課外授業にて和歌を水野美知先生より学び、卒業後もご指導頂きその後「槻の木会」の会員にならせて頂きました。

水野先生のお勧めで、横浜アカデミーの短歌教室にて閉講迄の十年間を、水野先生、原田先生、歌友の方々に御指導頂きましたが、和氣藹々とした真に楽しく、且つ厳しい勉強の場でしたから、ここで得たものは大変大きかったと思っております。

東京生まれの横浜育ち、現在は大和の地に五十余年を暮らしております。庭の山桜の街には小げらが幹をめぐり、目白や四十雀の囀りがにぎやかな田舎ですが、身に合っていると思っております。

未熟者でございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## ■『歌人 清原日出夫の生涯』を出版しました

●新入会員自己紹介 野一色容子

野一色容子です。「開放区」(同人誌)と「五〇番地」(雑誌)に歌や文章を出しています。現住所は「金沢区二丁目一番地」ですが、短歌の会で自己紹介をする段になると「開放区五〇番地のノイシキです」となるわけです。よろしくお願いいたします。

「五〇番地」は高安国世の創刊した「塔」から分かれて出来た結社です。高安没後、高安和子夫人が創刊し、清原日出夫らが合力して誕生しました。

清原は(六〇年安保を詠う学生歌人)として岸上大作とともに名を知られ、『流水の季』は高く評価されました。彼は元々「塔」に所属し、次の二首を含む「不戦祭」で中央歌壇にデビューしたのでした。

不意に優しく警官がピラを求め来ぬその白き手袋をはめし大きな 日出夫

何処までもデモにつきまとうポリスカーなかに 無電に話す口見ゆ

けれども次第に歌壇から遠ざかり、短歌発表を再開したのは「五〇番地」創刊に関わった一九九四年からでした。彼は二〇〇四年に惜しまれて逝去。

この度私は『ナンジャモンジャの白い花』歌人清原日出夫の生涯(文芸社)という本を出しました。

北海道の酪農家出身の彼は、命を慈しみ育もうとする姿勢を生涯貫きました。郷里の中学で起きた政治がらみの醜い事件や結婚後に住んだ長野での公私にわたる活躍をはじめ、二五〇首以上の作品もおさめています。どうか清原ワールドを味わって下さい。

年輪の芯となるべき出で立ちのなやかにして 実生の檜 (遺歌集『実生の檜』) 日出夫

## ■自己紹介

●新入会員自己紹介 日向輝子

「水原」の井澤幸恵さんのご紹介で入会させていただきました。

生まれ育った東京目黒から、当時まだ港北区の一部であった現・都筑区に転居したのは、小学校四年の春のこと。東京オリンピックの年でしたから、もう四十七年も昔のことになります。今でこそ、港北ニュータウンとして大型商業施設も立ち並び便利な都筑区ですが、当時は家の回りは里山や田畑ばかりで、「横浜のチベット」と呼ばれるほどの寂しさでした。結婚を機に横浜を離れ、転勤族の夫と共に転居を繰り返しておりましたが、今から十五年前に再び横浜市民に戻りました。

大学時代は国語国文科、それも中古文学専攻という、歌には縁のあるところにいたのですが、自分が作ることは思ってもみませんでした。そんな私の上に、歌が舞いおりて来たのは、夫の転勤で、初めて関東を離れ兵庫・西宮市に移り住んだ時のことです。

新しい土地での暮らしに戸惑う私を迎えてくれたのは、住いの近くを流れる夙川の両岸に咲く満開の桜でした。関東より少し色の濃いその花を見ているうちに、これまでとは違う方法で自分に向き合いたくなりました。それが何故歌だったのかは、今でもわかりません。その後間もなく、田井安曇主宰の「綱手」に入会し、早いものでもう二十一年が経とうとしています。

横浜歌人会の皆様に刺激をいただいて、また自分の新しい一面を見つけたらと思っております。

※既刊歌集『綺想曲』(不識書院、二〇〇四年)、『夕ぐれの記憶を探しに』(同、二〇一〇年)

横浜という地名の初見は、南区堀之内町の古刹、宝生寺に伝わる古文書にあることは、よく知られている。鎌倉時代、このあたりの地域を広く領有していた平子氏たいしこの一族が、一二世紀の後半承安年間に建立したというこの寺には、横浜の中世史を知るためにきわめて貴重な古文書二十五点が伝えられており、その一つ、嘉吉二年（一四四二年）の年号をもつ「横浜村薬師堂免団島等」の寄進状は、横浜村の名が出る最古の文書といわれている。

ずいぶん昔になるが、宝生寺をお訪ねしたことがある。ご住職は佐伯さんと言われるが、現在のご住職の祖母に当たられる方に、ご縁あって私共夫婦の仲人をつとめていただいたのである。関東大震災にも横浜大空襲にも耐えた古色ゆかしいお寺の一室で、ゆつくりとお話を伺ったが、なかに横浜村の名のある古文書の話があった。初めて聞く話で、新鮮な驚きを感じたことを覚えている。大袈裟に言えば、横浜にも中世があったという、当たり前のことに気づいたということだろう。

六十年も昔の話で、私も若かったが、横浜のイメージがずいぶん片寄ったものだったと思う。市歌にいう「とま屋の煙ちらほらり」と立つ一寒村が、開港によってまたたくうちに大都市に変貌したという、さらびやかな印象が圧倒的で、開港場の背後の広大な地域に原始古代以来営々と人々の営みが続いていたことに、まことにイメージが薄く、知識も関心も乏しかったというのが実情だった。私にとって、宝生寺の一日は、横浜の古く豊かな歴史に開眼する第一歩だったように思われる。

横浜といっても南の果ての果て、金沢区の六浦に住んでいる。横須賀との市境はつい目と鼻の先だ。ここまできると、おしゃれなエキゾチック横浜の香りはないが、起伏に富んだ地形と、辛うじて残っている泥臭い風物は、魅力的である。

ある日、散歩の途中で団地の外れに磨り減った石段を見つめる。この先に何があるのだろうかとうと下ってみれば、不意に現れた谷戸の路地には、羊歯の垂れ下がった防空壕や、木の蓋のついた昔ながらのゴミ箱があり、おばあさんが井戸の水を汲んでいたり、また、一軒の廃屋を呑み込ままばかりに金銀のスイカズラの花が咲き乱れていたりする。谷戸をぬけてしばらく歩いていくと、町外れに、小さなアーケード商店街がある。「六浦日用品市場」という、掠れた文字の看板に惹かれて迷いこんでみると、玩具屋の一軒以外どこもシャッターがしまっていて、半分剥がれたトタン屋根から青空が覗いている。更に足を延ばして丘に登れば、タンカーを浮かべた遙かな海と、そして眼下の住宅地の中に、ぼんぼんととり残されたような雑木林が見える。そんな林の一つを歩いてみようとうろついた挙句、ようやくアプローチを探し出した時など、ちよつとわくわくしたものだ。しかし、散策の途中たびたび出会うのが、「急傾斜崩壊危険区域」と書かれた看板である。

先日またひとつ木立が消え、斜面がコンクリートの擁壁に覆われた。壁のブロックの間から猛々しく雑草の伸びている風景は、やはり何とも寂しい。団地住民の身勝手な感傷と、解つてはいるのだけれど。

神奈川近代文学館 特別展

「茂吉再生——生誕百三十年斎藤茂吉展」

○会期 平成24年4月28日（土）から6月10日（日）（※休館日あり）

○会場 神奈川近代文学館展示室

○編集委員 尾崎左永子 三枝昂之

○主催 県立神奈川近代文学館

公益財団法人神奈川文学振興会

○後援 横浜歌人会、

NHK横浜支局、神奈川新聞社ほか

○交通

みなとみらい線「元町・中華街駅」下車

（6番出口）徒歩八分

神奈川中央交通バス11系統（桜木町駅）

保土ヶ谷駅）および横浜市営バス20系統

（山手駅→山下ふ頭） いずれも「港の見

える丘公園前」下車徒歩三分

※詳細は同館のホームページなどでご確認ください。

さい。

神奈川近代文学館は一九八四年に開館し、大衆文学、児童、詩歌などジャンルごとの大規模展示をはじめ、夏目漱石、芥川龍之介、泉鏡花など個人作家の展示、鎌倉、横浜、川崎など神奈川県を地域別に区分けした文学散歩の展示などの特別展・企画展を開催しています。また、日本近代文学の資料館として、尾崎一雄文庫、中村光夫文庫など個人の作家、収集家の業績を顕彰したコレクションのほか、神奈川ゆかりの多数の作家の肉筆資料、書籍類、文芸雑誌を中心とした膨大な数の雑誌を収集しています。

会員歌集紹介

小島熱子歌集『りんご1／2個』

池谷しげみ

『りんご1／2個』は「短歌人」に所属する小島熱子さんの第三歌集。前作『クレパスの線』につづく五年ほどの作品が納められている。

逝きし友の未来の時間をわれ生きて卓上にりんご1／2個

段葛をあゆむ人もいつか消ゆ遠近法のはての

さびしさ

タイトルにもなった一首目は、友の未来となるはずだった時間を引き受けて生きようという、悲しみのなかにもいのちが内包する〈時間〉に焦点をあてている。二首目は風景に触発された歌だが、遠近法のかなたへ消えてゆく人たちと、ながい歴史のなかに人生を終えていった無数の人たちが重層的に詠われている。何気ない事柄の奥にあるものの本質をさらっとみせてくれるのが、この歌集の特色だ。

はるの雲ゆるらにながれ若き日とおなじ書体に文字を書く夫

ゆるやかな韻律にのせて詠われたこの歌には心を遊ばせるゆとりがある。上下句のバランスが面白く、夫を最後に登場させたところも楽しい。

金沢に抛りて生き来し歳月やまなうらにしまふ

ふたすぢの川  
全身にゆきのにほひをまとひたるこどもがをりぬ。ほら、わたくしが。

作者の抛り所でもある故郷を詠む歌は一途さが加わって、一冊の柱ともなっている。日常のこまやかなところを掬いあげ、思いがけない手ざわりやことばの組み合わせで読者を引き込む一冊である。

発行 行 本阿弥書店

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町二一

八 三恵ビル 電話 03-3294-7068

発行日 二〇一一年一月二五日

定 価 二八〇〇円 (税別)

\*

結城千賀子歌集『天の茜』

平野久美子

『天の茜』は結城千賀子の第二歌集である。

一息には読みきれぬ深い歌集を時をかけて読む。

筆者は長く横浜歌人会会員であった故礧幾造氏の長女であり、父亡き後の「表現」を守り『礧幾造全歌集』（短歌新聞社）の編集と同時に『天の茜』を編んだと編集後記にある。大変思いの深い歌集である。

一生の虹見果てしと老父は筆を擱く歌の終なる  
覚悟しづかに

「平成二十二年十月、六十五年に及ぶ歌人生活に自ら終止符を打つ」と記されている。ひとりの娘からみた父、歌人としての父、父の敬愛した師の山口茂吉から更に師の師である齋藤茂吉、その何れの歌の世界をも、丹念に調べ辿り続ける著者の、歌の家

に生まれたという自負と、歌を愛する決意に溢れた歌集である。

六畳間の硝子戸開けて病む子規の壺中の天なる萩の花見ゆ

時代経し代赭のいろの温かく茂吉の硯意外に小さし

スペイン大使館の石塀長きに沿ふ歩み山口茂吉の犬の散歩道

ちちのみの父の命の迫れると目守り霜月無明の長夜

今はもう静けき額秀でしを冬麗きよき光は洗ふ事務的に父の死の後も思ひつつ折れてはならず長の娘われは  
思ひとはいかなる色もつ裡ふかくいまだ褪せねば一生の秘色

発行 行 短歌新聞社

〒166-8515 東京都杉並区高円寺南四一四三

九 電話 03-3312-9185

発行日 二〇一一年八月二八日

定 価 二八五七円 (税別)

\*横浜歌人会の今年度の活動のご案内

今年度も楽しい活動を予定しています。どうぞ積極的にご参加ください。詳細は個別にお送りする案内をご覧ください。

♪ 総会・新春歌会・懇親会

♪ 文学散歩（クルージング＋歌会）

♪ 研究会（シンボジュム）

♪ 観月会（歌会＋懇親会）

#### ◇新会員の紹介

- ・小笠原 信之（橄欖社）  
推薦者Ⅱ 間ルリ、千々和久幸
- ・辰巳 日出子（醍醐）  
推薦者Ⅱ 田谷幸子、広瀬美枝

入会については、横浜歌人会会則をご覧ください。  
会則はホームページでもご覧いただけます。

<http://yokohama-kk.web.infoseek.co.jp/soshiki/kaisoku.html>

#### ◇告知板

会員の歌集・歌書をホームページや会報でご案内します。出版時に会員の方で、二〇一一年二月一日以降に出版された歌集・歌書が対象となります。対象となる方は、左記事務局宛てに一報ください。



横浜歌人会会報 第一〇三号

発行日 二〇一二年一月二十九日

編集人 長野 義和

発行人 千々和久幸

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.web.infoseek.co.jp/>

振替口座 00200-5-7630

制作 アトリエ云 / 印刷 野崎印刷紙器株式会社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。